

アルフォンス・ルグロとオーギュスト・ロダン

ーイギリスでのロダン作品のプロモーションとC. アイオニデイス・コレクションの形成をめぐって

安藤智子（國學院大學）

オーギュスト・ロダンの彫刻作品が1880年代初め英仏海峡を渡り、一部のイギリス人に熱狂的に受け入れられたことの背景に、フランス人画家、アルフォンス・ルグロ(1837-1911)の多大な貢献があったことは意外にも知られていない。

本発表では、画家ルグロが、コレクターであるコンスタンティン・アイオニデイス、編集者ウィリアム・アーネスト・ヘンリーの協力を得て、イギリスにおいてロダンの作品の展示及び活字媒体での宣伝といったプロモーション活動を戦略的に行ったことを提示したい。このために、同時代の書簡や雑誌記事などの新たな一次資料をもとに、当時の状況を再構成するという手順を踏む。さらにこのような1880年代前半におけるルグロとロダンの交流を通じて、彼らの制作の場での影響関係を検討し、なぜルグロとその周辺の人々がロダン作品の普及に尽力していたかを論じる。

1880年頃にルグロが、イギリス在住のギリシア人コレクター、コンスタンティン・アイオニデイス(1833-1900、ギリシア名でイオニデイス)と一緒にパリのロダンのアトリエを訪れたことからルグロとロダンの交流が再開し、ロダン彫刻のイギリスへの展開が始まる。オーギュスト・ロダン(1840-1917)は1850年代にルグロと一緒にオラーズ・ルコック・ド・ボワボードランのアトリエで学び、《青銅時代》や《洗礼者ヨハネ》の像の制作を経て、この頃は未完の大作《地獄の門》となる装飾美術館の扉の制作を依頼されている。同時期にルグロは、ロンドンのスレイド・スクールの教授を務めていた。ディジョンに生まれ、パリへ上京してクールベのレアリスムの影響を受け、意欲的にサロンで絵画作品を発表していたが、1863年に渡英する。そして渡英以来ルグロは、アイオニデイスに自作品を購入してもらおうと同時に、アドバイザーとして彼のコレクション作品の購入に関わり、ロダンの彫刻は《考える人》や《ルグロの肖像》などの5点がコレクションに加えられている。

さらにルグロはロダンを友人であるマガジン・オヴ・アートの編集長、ウィリアム・アーネスト・ヘンリーに紹介する。1880年代前半にヘンリーは、ルグロについての論考を書き、アイオニデイスのコレクションを取り上げ、さらにロダン作品を初めてイギリスに紹介している。そのなかでルグロとロダンの作品のロイヤル・アカデミーでの展示における不当な扱いを糾弾している。

このようにルグロたちがロダンを積極的に支援したことには、ロイヤル・アカデミーと対抗し、新しい芸術を大衆に提示する意図があったと思われる。ルグロはスレイド・スクールで独自の教育の実現に努め、アイオニデイスは自身の蒐集した作品を学生たちに公開することをコレクション形成の理念として持ち、さらにその後ヘンリーはアイオニデイスが所有するフランス近代絵画の展覧会を開催した。つまり彼らはイギリスにおいて、教育を目的としてフランス近代美術の普及を行うという共通認識のもとに、ロダン作品のプロモーションを遂行したと考える。